

2020.8.5 第1回 研究会 NEWS LETTER

国際教養学部 言語文化学科



国際教養学部言語文化学科研究会に期待すること 国際教養学部長 安井一郎

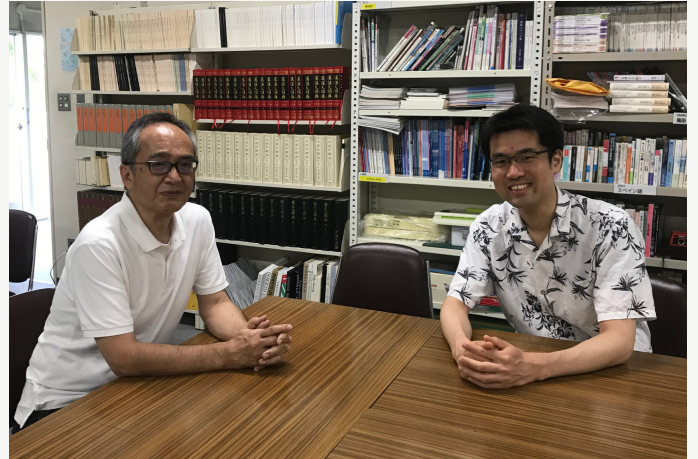
2020年8月5日に、国際教養学部言語文化学科研究会がおよそ10年ぶりに再スタートしました。再スタート第1回の話題提供者は、明田川聡士先生で、題目は「戦後台湾人作家と太平洋戦争の記憶」でした。当日は、東棟E-206教室で行われ、同時にWebExでオンライン配信され、教室とWebEx合わせて21名の参加者があり、明田川先生の話題提供に基づき、活発な議論が交わされ、大変有意義な研究会となりました。

国際教養学部は、法学部や医学部等のような専門学部ではありません。8研究科目群として表されているように、多彩な研究分野と学際的な興味関心を持つ研究者によって構成されています。「知の梁山泊」と言ったら言い過ぎかもしれませんが、言語、文化、社会、人間等に関わる様々な研究が展開され、交流し合う中から、新たな知的世界が広がられています。この研究会もそうした知的交流の一翼を担っています。再スタートを切った本研究会が、これまで以上に多くの知的刺激を学部の内外に生み出すことを期待しています。

～対談～

浅山：ご発表、ありがとうございました。専攻の異なる教養学部と同僚として、確認の意味も含めて、いくつか質問させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず私たちは、現代中国語文学の研究に対しては完全な素人ですので、見取り図がほしいところです。そこでこの分野の学会についてお伺いしたいと思います。



明田川：こちらこそ、ありがとうございました。中国文学は大雑把に分けると、「文言文」という文語体で書かれた古典文学（例えば、中国最古の詩集である詩経、杜甫や李白の唐詩など）、「白話文」という口語体に近い白話文学（明代以降の西遊記や水滸伝など）、20世紀以降の現代文学（魯迅や莫言など）という3つの括り方で分かれます。

古典から現代ものまで文学・思想を全て扱うのが日本中国学会です。それぞれの時代に対応する専門学会や研究会も多くあります。一方、20世紀以降の「現代中国学」を扱う学会として日本現代中国学会があります。政治や経済、歴史、法学といった文学以外の専門領域の研究者も広く加わる、より学際的な場です。但し、そこで扱われる文学とは、現代文学に限ります。また、同じように人文分野だけではなく、社会科学領域も含む学際的なもので「台湾学」を扱う日本台湾学会もあります。私は台湾学会の方に入会しています。

浅山：もうひとつ、全体的な流れについてお伺いします。私は国文学科の出身ですので、学生時代は文学研究についても触れる所がありました。古い話で恐縮ですが、そのころの国文学研究は、作家の伝記研究や作品を作家の思想的発展の中に位置づける研究などに対しては否定的で、受容の問題の「読者論」や、その流れとしての「流通出版論」、社会の事態として読解する「都市論」などが席卷していました。また哲学者や社会学者の議論を文学分析へ応用するようなものもよく見られました。

さて、現在の文学研究、あるいは中国語文学研究では、どのような「理論」や「研究方法」が中心的なのでしょうか、またその中で明田川先生のご研究は、どのような位置あいになるのでしょうか。

明田川：日本の中国語圏文学研究の場合、現在は伝記研究という大枠での作家研究や作品研究がメインです。バルトやデリダの理論を直接援用するようなタイプの研究は皆無です。新資料発掘や地道な文献考証の方が高く評価されます。ただ、発掘や考証と言っても、魯迅など百年前の作家であればともかく、時代によっては作者が存命で新資料など出てこない時の方がほとんどです。そのため、結果としておっしゃるような「読者論」「流通出版論」「都市論」といったようなものと組み合わせる場合が少なくありません。そうした研究手法は方法論としては中国語圏文学研究ではもはや当たり前前の感があり、私の位置付けもそこに収まると思います。ただ、あまりにも一般的で「当たり前」のことですので、私は取り立ててそれを強調することはありません。



浅山：今回のご発表は、台湾における太平洋戦争の記憶が課題でした。ご発表でも先行研究についてまとめられていらっしゃるようですが、もう少し大きな「台湾文学研究」の流れの中で、今回あつかわれたような問題は、どのように位置づけられるのでしょうか。

明田川：台湾における文学状況を言語の面から大雑把に説明すると、清末の文言文を使った古典的な文学に始まり、1920年代には北京や上海での文学革命の影響を受けて言文を一致させた「台湾新文学」が出てきました。その後1930年代以降は台湾人が日本語で創作する全盛期を迎え、1930年代後半から戦時下にかけては台湾在住の日本人（内地人）が創作活動の中心となります。

その後敗戦により日本人が引揚げると、台湾では中国大陸に本籍をもつ外省人（がいしょうじん、戦後台湾に移住した大陸出身者）が文学活動の中心を担うようになり、1960年代以降には遅れるようにして本籍を台湾にもつ本省人（ほんしょうじん）の中国語文学も活発になってきます。タイム・ラグが生じるのは、本省人は戦後にゼロから中国語を学んだ者が多かったので、習得し自由に創作できるようになるまで時間がかかったということです。やがて1970年代以降には本省人作家も外省人作家に比べて遜色のない作品を発表していくのですが、そうした過程で今回発表したような問題が出てきました。

浅山：ご発表の内容について、いくつかお伺いします。ひとつは、台湾の文学の中で本省人による戦争に関わる作品があまり書かれなかったとありましたが、それはなぜでしょうか。

明田川：太平洋戦争の中でも日中戦争を描く小説は戦後当初からありました。文学は国の文化政策と直結し、戦争の遂行とも深く関わってきます。国民党のもとで日中戦争時から描かれてきた日本の侵略戦争をテーマとする物語が、戦後も台湾社会で引き続き外省人作家の手によって描き続けられました。但し、この場合テーマは同じようなものに見えますが、戦争は終わっていますので、戦中と戦後の戦争文学は意味合いが異なります。

戦時中に台湾人は中国戦線よりも南洋へ送り込まれた人の方が圧倒的多数でしたので、戦後に本省人作家が戦争を物語化するとすれば、南洋での戦争もまた大きなテーマになります。しかし、実際のところ、1970年代までそうした小説は多く出てきませんでした。書けなかったとも言えるし、書く必要がなかったとも言えます。

太平洋戦中に台湾人は、軍属や軍夫（軍人ではなく民間人としての契約）として旧日本軍の末端に据えつけられました。軍人ではないので正確には軍隊の末端とは言えませんが、言わば土台から支えていた事実は変わりません。そうした日本の侵略戦争での加害者としての過去を、戦後の台湾社会で自ら名乗り出る人は少なかったのです。中国語で「漢奸」という言葉がありますが、民族の裏切り者・売国奴という意味で、日本語での辞書的な意味以上に人を罵倒するニュアンスが強いです。太平洋戦争中、旧日本軍によって労務動員された台湾人も南洋華僑からは「漢奸」と罵られ、辛い思いをしました。長い長い植民地統治が終わった直後の台湾社会では、誰も自分から「漢奸」であった過去を明かす必要はなかったのです。そうした理由もあり、太平洋戦争は本省人作家の間でも長いこと語られなかったテーマとなりました。

浅山：李喬のこれら作品に反戦の意図があったとして、それはなぜ明確に日本批判といった様相を呈していないのか、お考えをお聞かせください。また李喬の文学活動の中で、この戦争の記憶と関わらないものには、どういったものがあり、それらはどういった内容を扱うのでしょうか。

明田川：当時の作品にあからさまな日本批判が見られないという点では、私も同じように考えます。先ほど戦時中に台湾人は加害者の立場にいたと言いましたが、一方では「帝国臣民」として戦地に無理やり送り込まれた被害者でもありました（形式的には戦争参加が自発的な一面も見られたとはいえ）。台湾人は戦争終結までの間に20万人超が徴用され、そのうち3万人が犠牲になったと言われています。そうした加害者意識と被害者意識が相半ばする心理状態の中で、一方的な日本批判だけ展開しても根本的な問いや解決にはなりません。李喬もそのように解釈した面もあったのだと思います。そうしたことから、日本批判という様相ではない方法で反戦を訴えたのではないのでしょうか。

戦後の台湾では1947年に二二八事件という本省人と外省人の対立を決定的にした弾圧事件がありました。また、1950年代から60年代にかけては白色テロのレッドパージが巻き起こり、本省人・外省人を問わず無辜の市民が多く犠牲になりました。台湾社会では40年近くにも及ぶ世界最長の戒厳令期が続きましたが、その時代に二二八事件や白色テロについて語るのは社会的タブーでした。戒厳令解除前にそうした社会的タブーを衝くような物語を書き、読者や社会を啓蒙するのも李喬の特色でした。

浅山：私の勝手な解釈ですが、李喬が戦争の記憶としてあつかった題材は、結局のところ貧窮の苦しみと別離の悲しみといった、普遍的な人間の問題でしかなく、「戦争」である意味が、いまひとつわからないのですが、私のこの誤謬をご修正いただけるとありがたいです。

先生が発表でもおっしゃられたように、大岡であれば、捕虜とか人肉食とか、戦争でなければ出来ない問題として書かれているように思います。もう少し李喬が「戦争」をどう扱いたかったのか、お考えをおうかがいできればありがたいです。

明田川：文学作品は個別の経験と普遍的な真理を融合させていくものが多いです。日本の侵略戦争をテーマに描くプロパガンダ文学は当初からありましたが、李喬が創作活動を始めた1960年代にはそうした文学は下火になっていました。そのため、李喬作品の中でそのようなカラーが見えないというのは極めて自然なことだと思います。

貧窮の苦しみと別離の悲しみは、戦争を原因とすることに限りませんが、李喬の場合はそれを前面に直接的な形では出ないように戦争と結びつけて書き始めました。作者自身しか知り得ない生まれ故郷の寒村を舞台にした物語で、その個別性を同時代台湾社会にも押し広げて、さらには人間にとって普遍的な戦争への問いという形の中に落とし込むのが特徴的な作風だと思います。

また、捕虜や人肉食が作中で生々しく出てこないのは、世代が違うからでしょうか。書き手にとって体験の有無は大変重要なものです。終戦時に30代であった大岡は南洋での戦争を直接的な体験として書きましたが、李喬は戦中派とはいえ当時10歳前後で、本人が直接動員されたわけではありません。大岡は前線を描くことに固執し、李喬は自身が直接見聞きした銃後を描く過程を経て、台湾人の多くの若者が経験した前線を描くよう変わっていったということでしょうか。

浅山：第1回の研究会の担当をお願いして、ほんとうにありがとうございました。今後のご研究の進展をお祈りいたします。

明田川：皆さんからの忌憚のない意見が刺激的でした。こちらこそ、ありがとうございました。